

2012年5月、コンテスト用の写真撮影が目的で、棚田の風景で有名な本山町吉延を訪れた。すると、ちょうど目の前で、腰の曲がったおばあさんが畔を直していた。思わずカメラを向けると、「撮らんで！」と叱られた。

次に訪ねたときにも同じおばあさんがいて、棚田の坂を空の一輪車を引いては休み、引いては休み



美しい棚田を守るのも高齢化と後継者不足で難しくなっている



腰が痛いと言いながら苗の補植に励む農婦人

している。手伝いましょうと一輪車を手にすると、あまりに軽い。「これさえも、この人には重労働なのだ。このきれいな棚田を守っているのはこうした高齢の人たちだったのだ」と気づいた。

同時に、両下肢に障害のある妻の姿がダブった。今まで自分は何を求めていたのか。その日から、藤田さんの撮影スタイルが変わる。風景よりも、そこに住んでいる人たちの営みに焦点を当てたいと思った。

存在したという記録を残す

吉延に通ううちに、住民の女性から解説をつけた写真集を作ってくれないかと依頼を受けた。その記録アルバムが5冊目になったところ、「高知県立歴史民族資料館」館長の目に留まり、翌年、藤田さんの写真で吉延を紹介する写真展の開催が決まった。1年間、



神祭前日に氏子として72段の階段の掃除に励む



神仏を同時に祀り不意死した無縁先祖を弔う8月16日

吉延に密着して撮った写真展は、多くの人に集落のありのままを伝える機会となった。

そのときに民俗写真家は少ないので、ぜひ撮り続けてほしいと言われたことで、高知県内の過疎や消滅寸前の集落を回って撮影をするようになり、写真展を通して伝えてきた。その活動はメディアでも取り上げられている。

しかし、撮影は決して楽ではない。廃墟写真ではないから、そこで生活する住民がいて、やがて消滅していく過程が大事なのだ、そこで、1か所に密着して撮影をする。また、皆に歓迎されるとは限らない。集落を出て行った人たちが、自分の故郷が廃屋のあるみじめな消滅地区と思われるたくないと反対することもある。どうせ消滅してしまうから、必要ないと考え

る人もいる。たった一人残っている人からの依頼で撮っていると、元の住民全員の合意を得ていないではないかとクレームがくる。そういう場合は、途中まで撮った写真を差し上げて、切り上げる。

「残したいのは住んでいる人。逆に、出て行った人は撮ってほしいと思いません」。それでも通っているうちに、次第に意識が変化する。うちの集落が世間に知られて嬉しいと理解を示してくるようになるという。だから、集落の人たちとの普段の触れ合いは欠かせない。

写真展を見た人や学校からの依頼もある。「どんどん統廃合されているので、いつ廃校になるかわからない。今のうちに記録に残しておきたい」とは先生たちの切実な声だ。地区の神祭を撮っている



外国産稲(こうぞ)が主流になっても国内産稲を守り続ける家族